



十勝の開拓の歴史が学べる帯広百年記念館。これまで使用されてきた農業機械・農機具も展示されている

雑木林から  
農業地帯に発展

1月下旬、北海道十勝地方の玄関口「とかち帯広空港」に降り立つと、一面に真っ白な大地が広がっていた。

「これでも今日は暖かいんですよ」

地元の人たちは口をそろえてそう言うが、それでも気温は氷点下だ。

十勝といえば、日本を代表する農業地帯の一つ。主要作物は、小麦、馬鈴薯（じゃがいも）、豆類、ビートなど多岐にわたる、それぞれが全国の流通シェアの大部分を占めている。

しかし周知の通り、北海道の開拓が始まったのは明治時代。今でこそ、全国の耕地面積の約5パーセントを占める十勝地方も、当時はなんと、一面が雑木林だった。

道内ではめずらしく、政府が組織した屯田兵ではなく、民間主導で十勝の開拓が始まったのが1883年。広大な土地と寒冷地ならではの気候条件を生かし、畑作を中心とした農業を開始。畜産業とともに発展を続け、今日では日本全国どこに行っても、十勝ブランドの製品を目にしない日はないほどにまで成長した。

このように、100年以上かけて、ゼロから、独自の農業を築



北海道  
十勝  
from TOKACHI

農業の発展過程を  
アフリカへ

き上げてきた十勝地方。言うまでもなく、その成功を導いてきたのは、この土地で暮らす地域の人々だ。

彼らの農業にかける思い、そして、長年の苦勞を乗り越えて蓄積されてきたノウハウは、開発途上国の農業の発展にも生かせるはず。

JICA帯広はこうした考えの下、地元の大学や農業関連機関などと連携し、十勝を舞台に農業

地元農家の箕浦さん(左)が使用している農業機械の説明を聞く研修員たち。「作業の効率を上げるために、まずは今あるものを改善していくことから始めたい」

日本随一の農業地帯として知られる、北海道の十勝地方。明治時代の開拓以降、地域の人々によって改良・蓄積されてきた農業の技術や専門知識を学ぶため、開発途上国から多くの研修員が訪れている。



上のための農業機械・農機具改良」コースの研修員たち。1月から約2カ月間、JICA帯広が帯広畜産大学と協働で実施するこの研修に参加するため、ケニアとベナンからやって来た。

アフリカでは農業を主要産業とする国が多い。しかし、未だに多くの地域が人力・畜力に依存した農業で、適切な農地の利用や効果的な農作業が行われていないのが現実だ。コースリーダーを務める帯広畜産大学の岸本正准教授は「農業機械や農機具は、栽培方法や自然条件に従って改良を重ねていく必要がある。その方法を、十勝を例に学んでもらえれば」と話す。

この日、箕浦さんとともに「帯広百年記念館」を訪れた研修員たち。「十勝に機械が導入されるようになったのは、1950年代以降。それまでは、ほとんど人力や馬に頼っていたんですよ。まずは十勝が歩んできた農業の歴史を、館内の展示を見ながらじっくりと学んだ。

今から50年以上も前に使用されていた「プラウ」を片手に、「今も私たちはこれと同じ機具を使っています。でも土がガチガチで、すぐ先の部分が曲がったり、折れたりしてしまってます」と話すベナンのアタコラ・ドンガ地区農業開発センターのヤオ・ギ

ラウム・キンバさん。「十勝も同じような問題を抱えていた時期がある。でも、地元の鍛冶屋と農民が協力して農機具の改良を続けていったんです」という箕浦さんの言葉に真剣に耳を傾けていた。

さらに、箕浦さんの農場の倉庫に足を運び、トラクターやポテトハーベスターなどを視察。「十勝は一農家が占める耕地面積が広い。今まで馬をひいて耕していたのが、機械の導入により格段に作業効率が上がりました」と箕浦さん。倉庫の端に設けられた小さな作業場には鉄板や工具が並べられており、「ちょっとした修理は自分でやってしまいます。やろうと思っていけないことはありません

せんよ」と笑顔で話す。「彼にとって、機械も含めてすべてが、貴重なスタッフなんです」とケニア農業省のドミニク・ムゴイヤ・カムさん。国を代表して、十勝の技術を確実に吸収して伝えたい」と意欲を見せていた。

「もちろん、十勝で使用されているものが、そのままアフリカで使えるわけではありません。十勝の人たちの努力の過程を知ること、まずは自国の農業を見つめ直してもらいたい」と岸本先生は期待する。

十勝で学んだ研修員たちがリーダーとなり、アフリカの各地で「トカチスピリット」を生かした農業が発展していくこと。それがみんなの願いだ。

地元メーカー、日農機製工株式会社を視察する研修員たち。十勝地方には、十勝の農業を支える農業機械・農機具メーカーが多数ある



土地の特性に合う  
農業機械・農機具を開発

「農業のない冬こそ、メンテナンスが大事なんですよ」

分厚いダウンに身を包み、地元農家の箕浦邦雄さんの話に耳を傾けているのは、「農業生産性向



収穫した農産物を保管する倉庫。温度管理の機械について学ぶ

アフリカの研修員にとって、真冬の北海道での研修は過酷。かじかんた手で、懸命にメモを取っていた

